

日蓮大聖人御書全集

こうにちしようにんごへんじ

光日上人御返事

新版
1264
〜
1267

こうにちししょうにんごへんじ

光日上人御返事

こうあん

ねん

がつ

にち

さい

こうにちあま

弘安 4 年 ('81)

8 月 8 日

60 歳

光日尼

ほけきように

まき

い

ひと

みょうじゅう

あびごく

い

法華經二の卷に云わく「その人は命終して、阿鼻獄に入

うんぬん

あびじごく

もう

てんじく

ことば

とうど

にほん

らん」云々。阿鼻地獄と申すは天竺の言、唐土・日本には

むけん

もう

むけん

間

無

書

いっぴやくさんじゅうろく

じごく

無間と申す。無間はひまなしとかけり。一百三十六の地獄

なか

いっぴやくさんじゅうご

そうろう

じゅうにとき

なか

熱

の中に、一百三十五はひま候。十二時の中に、あつけれ

涼

堪

ども、またすずしきこともあり。たえがたけれども、また

緩

とき

むけんじごく

もう

じゅうにとき

ひととき

ゆるくなる時もあり。この無間地獄と申すは、十二時に、一時

片

とき

だいく

ゆえ

むけんじごく

もう

かた時も大苦ならざることはなし。故に、無間地獄と申す。

じごく

われ

い

そうろうだい

そこにまんゆじゆん

この地獄は、この我らが居て候 大地の底二万由旬をすぎ

さいげ ところ

せけん ほう

軽

もの うえ

て、最下の処なり。これ、世間の法にも、かるき物は上に、

おも もの した

だい

うえ

みず

ち

みず

重き物は下にあり。大地の上には水あり。地よりも水かる

みず うえ

ひ

みず

ひ

ひ

うえ

かぜ

し。水の上には火あり。水よりも火かるし。火の上に風あ

ひ

かぜ

かぜ

うえ

くう

かぜ

くう

り。火よりも風かるし。風の上に空あり。風よりも空かる

ひと

しだい

つく

あくにん

かぜ

ひ

し。人をもこの四大をもつて造れり。悪人は、風と火とま

さ

ち

みず

とど

ゆえ

ひとし

のちおも

じごく

ず去り、地と水と留まる。故に、人死して後重きは、地獄へ

お そう

ぜんにん

ち

みず

さ

かぜ

ひととど

墮つる相なり。善人は、地と水とまず去り、風・火留まる。

おも もの

さ

かる

もの

とど

ゆえ

かる

にんてん

う

重き物は去りぬ。軽き物は留まる。故に軽し。人天へ生ま

るる相なり。そう

地獄じごくの相、重おもきが中なかの重おもきは無間むけん地獄じごくの相なり。彼かの無間むけん

地獄じごくは縦横じゆうおう二万由旬にまんゆうじゆんなり。八方はつぽうは八万由旬はちまんゆうじゆんなり。彼かの地獄じごく

に墮おつる人々ひとびとは、一人いちにんの身み、大だいにして八万由旬はちまんゆうじゆんなり。多人たにんも

また、かくのごとし。身みのやわらかなること、綿わたのごとし。

火ひのこわきこと強は、大風おおかぜの焼亡しょうもうのごとし、鉄くろがねの火ひのごと

し。詮せんを取とつて申もうさば、我わが身みより火ひの出いずること十三じゆうさんあ

り。二ふたつの火ひあり。足あしより出いでて頂いただきをと通おる。また二ふたつ

の火ひあり。頂いただきより出いでて足あしをとあしおる。また二ふたつの火ひあり。

背せより入いつて胸むねより出いず。また二ふたつの火ひあり。胸むねより入いつ

て背せへ出いず。また二ふたつの火ひあり。左ひだりの脇わきより入いつて右みぎの脇わき

へ出いず。また二ふたつの火ひあり。右みぎの脇わきより入いつて左ひだりの脇わきへ出い

ず。また一ひとつの火ひあり。首くびより下したに向むかつて雲くもの山やまを巻ま

がごとくして下くだる。この地獄じごくの罪人ざいにんの身みは、枯かれたる草くさを焼や

くがごとし。東西南北とうざいなんぼくに走はしれども、逃にげ去さる所ところなし。他たの

苦くはしばらくこれおを置おく。大火たいかの一いつく苦くなり。この大地獄だいじごくの

大苦だいくを仏ほとけ委くわしく説とき給たまうならば、我われら衆生しゅじょう、聞きいて皆死みなしす

べし。故ゆえに、佛ほとけ委くわしくは説とき給たまうことなしと見みえて候そうろう。

いま にほんこく しじゅうごおくはちまんくせんろつぴやくごじゅうはちにん ひとびと

今、日本国の四十五億八万九千六百五十八人の人々は、

みな じごく お たも いちにん お

皆この地獄へ墮ちさせ給うべし。されども、一人として墮つ

思 れい こうあんしねんごがついぜん

べしとはおぼさず。例せば、この弘安四年五月以前には、

にほん じょうげばんにん いちにん もうこ せ 値 思

日本の上下万人、一人も蒙古の責めにあうべしともおぼさ

にほんこく にちれんいちにん こと く

ざりしを、日本国にただ日蓮一人ばかり、かかる事この国に

しゅつたい 知 とき にほんこく しじゅうごおくはちまんくせん

出来すべしとする。その時、「日本国の四十五億八万九千

ろつぴやくごじゅうはちにん いっさいしじゅう いちにん たこく せ

六百五十八人の一切衆生、一人もなく他国に責められさ

たま だいく たと 焙 烙 もう かま みず い

せ給いて、その大苦は、譬えばほうろくと申す釜に水を入れ

雑 魚 もう ござかな 数 多 い か 柴 き 焚

て、ざつこと申す小魚をあまた入れて、枯れたるしば木をた

かんがごとくなるべし」と申せば、もう「あらおそろし、いま恐いま忌々

し。打ちはれ、所を追え、流せ、殺せ。信ぜん人々をば、う張ところおながころしんひとびと

田ばたをとれ、財を奪え、所領をめせ」と申せしかども、でん畠取たからうばしよりよう召もう

この五月よりは大蒙古の責めに値つてあきれ迷うほどに、ごがつだいもうこせあ呆まよ

さもやと思う人々もあるやらん。にがにがしゆうしてせめおもひとびと苦々責

たくはなけれども、有る事なれば、あたりたりあたりたり、あこと当

日蓮が申せし事はあたりたり、ばけ物のもの申すようにこにちれんもうこと化ものもう

そ候めれ。去ぬる承久の合戦に、隠岐法皇の御前にして、そちらいじようきゆうかつせんおきのほうおうおんまえ

京の二位殿などと申せし何もしらぬ女房等の集まつて、きようにいどのもうなににようぼうとうあつ

おう すす たてまつ いくさ お よしとき せ 慌 たま
王を勧め奉り戦を起こして、義時に責められあわて給い
しがごとし。

いまいまごらん

ほけきようひぼう とが

にちれん 卑

今々御覧ぜよ。法華経誹謗の科といい、日蓮をいやしみ

ばち

もう

きよう

ほとけ

そう

さんぼうひぼう

たいか

し罰と申し、経と仏と僧との三宝誹謗の大科によつて、

げんしよう

くに

しゅらどう

うつ

ごしよう

むけんじごく い

現生にはこの国に修羅道を移し、後生には無間地獄へ行き

たも

給うべし。これまたひとえに、弘法・慈覚・智証等の三大師

ほけきようひぼう

とが

だるま

ぜんどう

りつそうとう

いちじようひぼう

とが

の法華経誹謗の科と、達磨・善導・律僧等の一乗誹謗の科

ひとびと

けつこう

たも

こくしゆ

とが

くに

おも

と、これらの人々を結構せさせ給う国主の科と、国を思い

しようじよ

しの

か

かんが

つ

しめ

もち

かえ

あだ

生処を忍んで兼ねて勘え告げ示すを用いずして還つて怨

をなす大科、先例を思えば、呉王・夫差の伍子胥が諫めを用

たいか せんれい おも ごおう ふさ ごししよ いさ もち

いずして越王・勾踐にほろぼされ、殷の紂王が比干が言を

えつおう こうせん 滅 いん ちゆうおう ひかん ことば

あなずりて周の武王に責められしがごとし。

しゆう ぶおう せ こうにちあまごぜん しゆくじゆう ほけきよう

しかるに、光日尼御前は、いかなる宿習にて法華経を

ごしんよう こやしろうどの しん そうら

ば御信用ありけるぞ。また故弥四郎殿が信じて候いしかば、

こ すす くどくむな こ りようぜん

子の勧めか。この功德空しからざれば、子とともに霊山

じようど まい あ たま うたが おりよう

浄土へ参り合わせ給わんこと、疑いなかるべし。烏竜とい

もの ほけきよう ぼう じごく お こ

いし者は、法華経を謗じて地獄に堕ちたりしかども、その子

いりゆう もの ほけきよう か くよう おや ほとけ

に遺竜といいし者、法華経を書いて供養せしかば、親、仏

な みようしようごんのう あくおう みこ

に成りぬ。また妙莊嚴王は悪王なりしかども、御子の

じようぞう じようげん みちび しやらじゆおうぶつ な たも

浄蔵・浄眼に導かれて、娑羅樹王仏と成らせ給う。その

ゆえ こ にく はは にく はは ほね こ ほね まつさか かしわ

故は、子の肉は母の肉、母の骨は子の骨なり。松栄うれば柏

よろこ し枯 らん泣 こころな そうもく とも よろこ とも

悦ぶ。芝かるれば蘭なく。情無き草木すら、友の喜び友の

なげ ひと おや こ ちぎ たいない やど

歎き一つなり。いかにいわんや、親と子との契り、胎内に宿

ここのつき へ う お すうねん やしな かれ 担

して九月を経て生み落とす、数年まで養いき。彼になわ

かれ 甲 おも 甲 恨

れ、彼にとぶらわれんと思いに、彼をとぶらううらめし

のち おも 心 苦

さ、後いかんがあらんと思うこころぐるしさ、いかにせん、

こ おも きんちよう ひ なか い こ おも

いかにせん。子を思う金鳥は火の中に入りなき。子を思い

ひんによ　ごうが　しず　か　きんちよう　いま　みろくぼさつ　か

し貧女は恒河に沈みき。彼の金鳥は今の弥勒菩薩なり。彼の

かわ　しず　によにん　だいぼんてんのう　う　たま

河に沈みし女人は大梵天王と生まれ給えり。いかにいわんや、

いま　こうにちしようにん　こ　おも　ほけきよう　ぎようじや　な　たも

今の光日上人は子を思ふあまりに法華経の行者と成り給

はは　こ　りようぜんじようど　まい　たも

う。母と子と、ともに靈山浄土へ参り給うべし。その時、

ごたいめん　嬉

御対面いかにうれしかるべき、いかにうれしかるべき。

はちがつようか

八月八日

こうにちしようにんごへんじ

光日上人御返事

にちれん　かおう

日蓮　花押